

端方旧蔵三井本「九成宮醴泉銘」拓の入墨傾向

— 諸本との比較をもとに —

Propensities of Modifications with Ink Observed on the Rubbing of Inscription on Sweet-Water Spring at
Jucheng Palace in the Mitsui Collection Once Belonging to Duanfang: Based Upon A Comparison with
Multiple Versions

澤 田 雅 弘

SAWADA Masahiro

はじめに

九成宮醴泉銘のわが国の影印本には、広く行われている端方旧蔵三井本のほか、故宮博物院所蔵李祺本、李鴻裔旧蔵三井本、台東区立書道博物館所蔵本があり、さらに最近では中国からも旧拓が陸續刊行されるようになった。わが国では端方旧蔵三井本（以下、端方本と呼ぶ）が他本を圧して耳目を集めるのが現況ではあるが、その一方で、李祺本の存在と李祺本との筆趣の違いが広く認識されつつあるようにも思われる。稿者も一年次生に九成宮醴泉銘書法の印象を問いかけたのち、端方本と李祺本との同じ一段を対照したいくつかの校碑図と、中国の書論に見える九成宮醴泉銘書法論を幾則か併載して講義している。要点は、九成宮醴泉銘に対して、いま学生た

ちが抱く印象の多くは端方本によって形成されたものであると思われること、しかし、端方本が九成宮醴泉銘の真相を示している保証はないこと、また一般的には石刻は時代とともに筆画が痩せること、さらに書論には観念的な価値観が介在するきらいがあるものの、古人が論ずる九成宮醴泉銘書法は、端方本よりもむしろ李祺本の方に類すると思われることなどである。

しかし、講義の改善を重ねていく間に、端方本の筆画が李祺本よりも瘦細である傾向は、必ずしも時の経過がもたらした結果ばかりではないことも見えてきた。そこで、本稿では、比較的印刷の精美的な諸本や性格が異なる諸本と対照しながら、端方本が作り出した筆趣の根拠を具体的に提示することにした。

対照に用いた諸本と略称は次のとおりである。なお書名中にみえる各本の拓出時代の表示については、各出版物に拠り、その当否をいまは論じない。

- 端方本…『中国法書選31 九成宮醴泉銘』二玄社、一九八七年
 - 李祺本…『原色法帖選20 九成宮醴泉銘』二玄社、一九八五年
 - 国家北宋拓…『善本碑帖精華・宋拓九成宮醴泉銘』西泠印社出版社、二〇一九年
 - 李鴻裔本…『原色法帖選40 九成宮醴泉銘（李鴻裔本）』二玄社、一九九一年
 - 香港北山本…『北山十宝 唐歐陽詢九成宮醴泉銘』香港中文大学文学館、二〇一五年
 - 書博本…『書道博物館蔵 九成宮醴泉銘』（未装）出版年不明
 - 歐齋本…『欧齋石墨系列 明拓九成宮醴泉銘』故宫出版社、二〇一五年
 - 国家南宋拓…『中華宝典—中国国家博物館蔵法帖書系（第一輯） 歐陽詢九成宮醴泉銘（宋拓本）』安徽美術出版社、二〇一八年²⁾
 - 秦刻初拓本…『秦刻初拓九成宮醴泉銘』芸苑真賞社、珂羅版³⁾
- 諸本との対照図表について
- 端方本の入墨傾向の概要を示すために、便宜的にいくつかの入墨

傾向に分類してA～Fの各表に図示する。図表の構成は、左から分類表ごとの通し番号、当該字が見える中国法書選本頁数（4～39）と同頁内の行数（①～④）、次いで端方本該字全形、端方本の該字中の問題箇所を掲げ、その後に李祺本、国家北宋拓、李鴻裔本、香港北山本、書博本、欧齋本、国家南宋拓、秦刻初拓の当該箇所を列した。

分類符号（A～F）の意味は次のとおりである。

- A…入墨箇所及び入墨手法の例示
- B…点画の部分消去
- C…転折（縦横画の接点を含む）の加工
- D…点画の変容（短小化）
- E…点画の変容（瘦細化）
- F…点画の変容（方向変容・湾曲化ほか）

以下、分類符号ごとに、図表各字について端方本の入墨状態を簡単に補足する。

〔A〕

ここでは、まず端方本の入墨痕が顕著な箇所を選んで、その様子を概観する。

1 郡…第一画転折右上の泐損箇所に淡墨を塗布する。2 鉅…「コ」部転折内側の泐損箇所に淡墨を、また横画末端の整形に淡墨を、ま

		端方本	李祺本	国家北宋拓	李鴻裔本	香港北山本	書博本	欧齋本	国家南宋拓	秦刻初拓本
1	4 ③	郡								
2	4 ②	鉅								
3	10 ③	以								
4	12 ④	物								
5	14 ③	聖								
6	16 ③	沙								
7	16 ④	松								
8	21 ②	而								
9	21 ③	以								
10	21 ④	甘								
11	23 ②	暎								
12	28 ①	相								
13	32 ④	琛								
14	33 ③	鑿								
15	37 ④	天								

【A表】

		端方本	李祺本	国家北宋拓	李鸿裔本	香港北山本	書博本	欧斋本	国家南宋拓	秦刻初拓本
1	4 ④	撰	撰	撰	撰	撰	撰	撰	撰	撰
2	7 ③	日	日	日	日	日	日	日	日	日
3	8 ④	徐	徐	徐	徐	徐	徐	徐	徐	徐
4	10 ③	德	德	德	德	德	德	德	德	德
5	14 ①	離	離		離	離	離	離	離	離
6	15 ②	舊	舊	舊	舊	舊	舊	舊	舊	舊
7	15 ③	勞	勞	勞	勞	勞	勞	勞	勞	勞
8	15 ④	回	回	回	回	回	回	回	回	回
9	17 ①	於	於	於	於	於	於	於	於	於
10	18 ④	澗	澗	澗	澗	澗	澗	澗	澗	澗
11	22 ①	霄	霄	霄	霄	霄	霄	霄	霄	霄
12	22 ②	雙	雙	雙	雙	雙	雙	雙	雙	雙
13	23 ④	唯	唯	唯	唯	唯	唯	唯	唯	唯
14	31 ①	惟	惟	惟	惟	惟	惟	惟	惟	惟
15	34 ③	變	變	變	變	變	變	變	變	變

【B表】

たその右側の泐損箇所にはやや濃墨を、それぞれ点描の要領で入れる。

3 以…末画の左右にある泐損を点描要領で淡墨を数筆入れて、入筆部先端には点描要領で濃墨を数筆入れて、零型に整形する。**4** 物…

「勿」部の転折の角張りを消去しようとしたのか、淡墨を点描要領で大小を混ぜて四筆ほど入れる。**5** 聖…「王」部末画の始筆箇所の左方から下方にわたる泐損部に、淡墨を広く塗布した上にやや狭い範囲に濃墨を点描要領で入れ、始筆の形状を整形する。**6** 沙…「少」部第二画左下の泐損部に淡墨を塗布して左偏との間を分ける。**7**

粉…右隣の転折と右端の小画との間の泐損箇所中央部に、濃墨を渴筆で僅かに入れる。**8** 而…第二画と第四画との間に広がる泐損箇所に両画の位置を弁別できる程度に濃墨を渴筆で三カ所ほど入れ、その右上部第二画始筆右辺には潤筆で微小の濃墨一筆と淡墨二筆とを入れる。また第六・七画の間の泐損部にもやや濃墨で二小点を入れる。**9** 以…末画の輪郭を浮き立たせるように、淡墨を塗布した後には濃墨を点描要領で入れて整形する。**10** 甘…横画末端下辺の泐損部に濃墨を点描要領で二筆、また下辺を整形するように横に一筆を入れる。**11** 暎…「日」部内の小横画前半周辺の泐損部に濃墨の渴筆で塗布し、下辺部には濃墨で一点、左の縦画の内辺に沿うように濃墨で縦に三本を入れる。**12** 相…李鴻裔本・香港北山本に明白なとおり、「木」の豎画上半を横断する傷を淡墨で塗布する。**13** 琛…末画の筆

画上下辺の泐損部を淡墨で塗布したのちに、上辺には小さめの、下辺にはやや大きめの点描を、それぞれ幾筆か入れて整形する。また末画末端は下垂の泐損との境界を見極め、濃墨の大きめの一筆と小さめの一筆で整形する。**14** 鑿…「爻」部右上の転折部の外辺にやや濃墨を点描要領で幾筆かを入れ、転折直前の横画末端の上下辺にも濃墨の幾筆かを点じて、転折の肩張りを強調する。**15** 天…中央の「一」「人」の交叉部一帯を淡墨で塗布した上に、濃墨で「人」部第一筆始筆の左辺に二筆ほど点じ、また「人」が横画と交叉した直後の左右と股下にそれぞれ数筆を点じて整形する。

右の15例は端方本に随所にある入墨箇所のうち、比較的入墨の痕跡が見える部分を掲げたものである。現時点では入墨が一時に施されたものか幾度かにわたるものか分からない。また入墨者が一人であるか否かも判断できないが、これら各図によつて端方本の入墨傾向の大概をいえば、広い範囲の泐損には淡墨と濃墨を使い分けて整地するように塗布するが、筆画の際には図表に例示したように、淡墨次いで濃墨を使つて点描の要領で入念に、しかし、筆画を削ぐ危険を恐れず、筆画の際にまで果敢に入墨する。したがって、端方本の筆画の際は他本に比べてすっきりしている。その入墨効果が端方本の明瞭で鋭利な筆趣を生み出す要因になっている。しかし、その思い切りよく筆画の際にまで攻め入るような入墨は、以下に見るよ

		端方本	李祺本	国家北宋拓	李鸿裔本	香港北山本	書博本	欧斋本	国家南宋拓	秦刻初拓本
1	5 ①	盪								
2	5 ②	避								
3	6 ③	起								
4	7 ④	窮								
5	8 ⑤	氣								
6	10 ①	四								
7	10 ①	撫								
8	13 ③	胼								
9	14 ③	聖								
10	18 ④	宮								
11	21 ④	如								
12	23 ④	軋								
13	26 ③	東								
14	26 ④	泉								
15	36 ④	日								

【C表】

うに、時に筆画にさまざまな変容をもたらす。

【B】

ここでは、端方本の入墨による変容・失敗の实例を例示する。

1 撰…「共」部の上の横画中央部全てと右端を消去する。中央部は
泐損と誤認した可能性も考えられるが、右端を消去した理由はわか
らない。2 日…転折部分内側の泐損部、入墨によって背勢を作る一
方、転折外側の入墨も過ぎたことで、筆画が軟弱に陥る。3 徐…
「余」部第一画末端部の泐損箇所にて墨を垂したのか、大きな
点状の雫痕がある。またその上方にも淡墨を塗布した上に点描要領
で濃墨を入れるが、その結果、第一画をやや短くした感を否めない。
4 徳…「四」部転折あたりに広がる刻面の糜爛を各本同様に入墨に
よって筆画を浮上させるが、転折直前の筆画上辺を削いだ。5 離…
「佳」部のフの小横線を消去する。6 旧…「佳」部の小横画、5 離同
様に消去する。後出の12 双、13 唯、14 惟も同様であることから、消
去は迂闊の失敗ではなく、入墨者の誤認識の反映であるかもしれない
が、碑中には消去しない例もある。^①7 勞…「力」部の転折、他本
全てが肩を大きく張り出している箇所を削ぐ。8 因…「口」部転折
後の豎画、外辺を削いで背勢を作るほか、内側を誤って削ぐ。9
於…左偏豎画始筆箇所、入墨によって左側を削いで鋒鈍を失う。10
潤…「彡」部第二画始筆箇所の左側の泐損箇所に入墨し第二画左側

の一部を削ぎ、第一画からの脈絡を失う。11 霄…「雨」部左側両点
一帯の糜爛を整える際、両点とも痩せ、上の点は上半を削いで、方
向が変わる。12 双…「佳」部のフの小横線を消去する。13 唯…「佳」
部のフの小横線を消去する。14 惟…各本とも「佳」部の頂部にまた
がる泐損箇所中の筆画の痕跡をたどってフの小さな横線を残してい
るのに対して、当該筆画の中央に淡墨を点じて消去する。15 変…
「土」部の横画始筆部一帯を整形したが、始筆の形状が奇怪に化す。
右に見たとおり、入墨によって生じる変容は多様であるが、1 撰
の消去意図が不明であること、また5 離、6 旧、13 唯、14 惟の「佳」
の一部の消去が入墨者の誤認識の反映であったかもしれないこと以
外は、大概、過剰な筆画の明瞭化を意図した結果の失敗であること
が知られる。

【C】

ここでは、端方本に顕著な不即不離を助長する意図的な整形加工
の傾向を例示する。

1 孟…転折直前の横画上辺下辺に入墨し、筆画幅をすぼめて豎画と
の接点を極小にし、転折の肩の張り出しを強調する。その結果「皿」
部第二画の横画と第四画の始筆との距離が拡大する。2 避…「尸」
部第二画の小横画末端部上辺と「口」部第二画の小横画末端部上辺
に、それぞれ入墨して横画末端に筆鋒が右下に抜ける形状を作り出

		端方本	李祺本	国家北宋拓	李鸿裔本	香港北山本	書博本	欧齋本	国家南宋拓	秦刻初拓本
1	4 ③	魏								
2	7 ①	百								
3	7 ④	迴								
4	8 ③	蒸								
5	9 ②	之								
6	10 ②	始								
7	12 ③	遺								
8	18 ①	為								
9	30 ②	盛								
10	31 ①	惟								
11	33 ④	謝								
12	33 ④	功								
13	38 ②	文								
14	8 ①	欲								
15	8 ④	信								

【D表-1】

		端方本	李祺本	国家北宋拓	李鴻裔本	香港北山本	書博本	歐齋本	国家南宋拓	秦刻初拓本
16	9 ②	漢								
17	9 ③	能								
18	10 ①	臨								
19	15 ④	貴								
20	17 ②	觀								
21	18 ②	喝								

【D表-2】

1	7 ③	震								
2	12 ①	遂								
3	19 ③	不								
4	20 ③	蹠								
5	21 ②	随								
6	22 ①	南								
7	27 ②	寔								
8	23 ④	流								

【E表】

		端方本	李祺本	国家北宋拓	李鸿裔本	香港北山本	書博本	欧斋本	国家南宋拓	秦刻初拓本
1	5 ④	抗								
2	9 ④	冠								
3	10 ③	遠								
4	11 ①	琛								
5	12 ②	功								
6	13 ①	疾								
7	14 ②	怡								
8	14 ②	養					欠			
9	14 ④	産								
10	14 ④	深								
11	15 ③	毀								
12	18 ①	無								
13	24 ②	云								
14	34 ②	品								
15	36 ①	史								

【F表】

し、豎画との接点を小さくする。また「口」の転折直前の横画上辺にも入墨して転折の肩の張り出しを増幅させる。3起・「己」部、前述同様に転折直前に入墨して豎画との接点を小さくするが、転折の内側を削ぐ結果になり、筆画が弱まる。4窮・「穴」の転折部を前述同様に整形する。5気・第二画の転折部を前述同様に整形する。6四・第二画の転折部を前述同様に整形して横画を背勢気味にし、転折後の豎画後半の右辺も削いで、豎画を背勢に加工する。7撫・「無」上部の転折を前述同様に整形し、とくに横画下辺に攻め入って背勢の気味を加える。8胼・「月」部の転折、前述同様に整形するが、豎画の輪郭左辺が横画を挟んだ前後で位置がやはずれて、筆画が弱まる。9聖・「口」部の転折、前述同様に整形するが、豎画の輪郭左辺が横画を挟んだ直後に陥没して、筆画が弱まる。10宮・上の「口」の転折、前述同様に整形し転接の肩張りを大振りにする。11如・「口」部の転折、前述同様に整形し転接の肩張りを大振りにする。12乾・「日」部の転折、前述同様に整形し転接の肩張りを大振りにする。13束・「日」部右下角、豎画の内外両辺に入墨し、先端を右に曲げて角の風通しを高める。14泉・「白」部右下角、13束同様に豎画の内外に入墨し、先端を右に曲げる。15日・右下角、第四画の横画末端の上辺を下降させて豎画との接点を極小にする。右に例示した転折の整形（接点を極小にして不即不離を具現化し肩

張りを険しくする）と「口」右下角の整形（角の内側の空間を拡げて不即不離を具現化する）の事例は、紙幅上15例にとどめたが、その事例は多数あることから、不即不離は端方本入墨者が思い描く九成宮體泉銘書法の典型の一つであったと思われる。その典型的な姿は15例中では2盃、3避、6四、7撫、10宮、13束、15日などであったであろう。

【D】

ここには、入墨によって招いた点画の短小化や不即不離の緩みの事例を図示する。

1魏・「禾」部の末点を被う恐らく帯状の傷に上下辺三カ所入墨し、下辺が削がれ下方に屈曲する形状に化し縮小する。2百・第二画「ノ」部末端左側の入墨によって短縮し方向も変わる。3廻・「回」の上辺の横画と「回」内の第一画の豎画との間の入墨により、豎画始筆の鋒鋭を損ない両画の間隔が拡大する。4蒸・末の右三点の上方の入墨によって上方の横画との間隔が拡大する。5之・第一筆、周辺の入墨によって短小化し下の両画との間隔が拡大する。6始・「ム」部の横画末端と末画の間の入墨により、横画が短縮し末点が瘦せ、両画の間隔が拡大する。7遺・「貝」部末の両点の上辺部へ入墨により、左の点は始筆が変形し、右点は短小化し横画との間隔が拡大する。8為・末の各点周辺への入墨により、短小化と上部

横画との間隔が拡大する。9 盛…第一画始筆部上端への入墨によって、始筆位置が下降し第二画との距離が拡大する。10 惟…「佳」部最下の横画の始筆部への入墨により、始筆位置が上方の横画の始筆位置よりも右にある状態を招く。11 謝…「身」の「ノ」部先端付近一帯への入墨により、「ノ」が短縮し、「言」第二筆末端が削がれ、「身」中の小横画（図中央）が瘦せる。12 功…「工」部第一画と第二画の間への入墨により、第二画始筆に僅かな反りを生み上の画との間隔がわずかに拡大する。13 文…第二画と第三画の間への入墨により、第三画始筆の鋒鈍を削ぎ両画間が拡大する。14 欲…第一筆落筆付近への入墨により、当該画の始筆部が削がれて短縮する。15 信…第一画及び「言」第二画の間への入墨により、横画始筆の形状が変容する。16 漢…末部の両点一帯への入墨により左は短小化し、右は瘦せる。17 能…末点一帯への入墨によって短小化する。18 臨…右傍の「ナ」の横画末、入墨によって短縮する。19 貴…「貝」の両点一帯への入墨により左は短小化し右は瘦せる。20 覩…「見」の左払いの始筆部に入墨したことで、始筆の位置が下り、上の横画との関係が変容する。21 竭…「立」部第二画上辺への入墨によって当該横画が上に反る形状に化し、「立」中央の両点付近の入墨によって両点の始筆位置が下降する。また「立」末画の末端と「勺」部第一画末端付近の入墨によって「勺」部第一画が短小化する。

右のとおり、拗損部分に入墨することによって筆画の一部が削がれて短小化したり、始筆位置の下降などを招き、二つの筆画の間隔が離れる結果、不即不離の妙を低減している。

【E】

端方本は点画の輪郭を鋭利に整形する意図が強く働き、入墨が筆画を侵食して筆画の瘦細化を来すことが頻繁である。ここではその顕著な事例を掲げる。

1 霞…「雨」の左側の両点、周囲に入墨したことで極度に瘦せる。
2 遂…「辵」の末画直前の画、左側に入墨して極度に瘦せる。3 不…第三画周辺への入墨による瘦細化が広く認められるが、就中、豎画との交叉前が著しい。4 躋…中央部全般への入墨によって筆画を浮き出させているが、同時に瘦細化も随所に生じる。5 随…「辵」第二画、周囲の入墨によって瘦せる。6 南…入墨によって特に左上半部の筆画が瘦せる。7 寔…「ナ」の転折箇所、周辺の入墨によって瘦せる。8 流…右旁下部の左払いが、周囲の入墨によって瘦せる。

右の事例からも知られるとおり、端方本入墨者は、筆画を過剰に明瞭化しようとする余り、筆画を著しく瘦せ細らせる結果にいたっている。

【F】

ここには、端方本入墨者が筆画を整形しようとするあまり、本来

の筆画の形状が著しく変容する事例を列挙する。

- 1 抗…入墨によって末画末端を削ぎ、はねの形状が変容する。
- 2 冠…「元」部第一画周囲に入墨し小横画が点に変容する。
- 3 遠…「レ」第一画は本来の形状が不明確であるが、入墨によって香港中文本を除く他本にはない左下方への牽絲を作り出す。
- 4 琛…末画周囲への入墨により瘦せるだけでなく上辺が削がれて上に反る形状に変容する。
- 5 功…「工」第二画左辺に入墨して、国家南宋拓を除く他本の傾斜する形状と異なる直立の形状に変容する。
- 6 疾…「彳」部の上の点、入墨によって下辺が削がれただけでなく、左下への牽絲を作り出し、香港中文本を除く他本の形状とは異なる。
- 7 怡…「ム」部の転折直前二帯への入墨によって、転折時の鋒鋇が削がれ、筆の受け渡しに変容する。
- 8 養…上半の三横画と交叉する左払いが、その最下の横画上辺の拗損に対する入墨によって途切れ、横画下から改めて落筆する二筆の形状に変容する。
- 9 産…第三画始筆周辺の入墨によって右上に筆鋒を向けて落筆した形状が変容する。
- 10 深…「シ」第一画周囲の入墨によって棱角が削がれて円転の形状に化す。
- 11 毀…「土」部豎画の始筆部付近の入墨によって始筆の鋒鋇が失われ、豎画の長さも短かく変容する。
- 12 無…中央の四本の豎画の左二本が入墨によって形状が変容し筆勢を喪失する。
- 13 云…「ム」部始筆周囲に入墨し整形するが、始筆の鋒鋇を消去し右辺を削いで硬直化を招

く。14 品…左下の「口」の転折部左にある拗損の一部に入墨するが、転折後の豎画始筆の形状を誤解し、鋒鋇が左上に長く出る奇形に化する。15 史…第二画の転折一帯の刻面の糜爛に入墨するが、転折の形状の変容と転折直後の豎画の虚弱化を招く。

右には、筆画の変容の著しい例を掲げたが、その変容を招いた要因には、これまでの各表にすでに明確なとおり、筆画に対する過剰な整形志向と、入墨者の九成宮醴泉銘書法に対する解釈が比較的強く反映する入墨傾向とを挙げることができよう。

おわりに

本稿では端方本の入墨箇所を便宜的に種別し、比較的顕著な箇所を例示したに過ぎず、入墨箇所は満遍なくあつて到底列挙しきれない。もとより入墨は端方本に限って認められるのではなく、各本間には頻度や程度に差はあるものの、対照した全ての本に認められる。したがって各本には各本なりの入墨傾向がありうる。しかし、端方本には以上観察してきたとおり、際立った特色がある。その特色を総括すれば次の二点に収斂する。

- (一) 転折では直前の横画末端部の上辺下辺に入墨して、転接での豎画との接触を小さくし、併せて転折の肩張りを大振りにして險しさを増す。この方法によって転折内側に風を通すか通

さないかのような隙間を生み出す。その手法は「口」部右下の豎横画の接点にも認められる。端方本はこれらの入墨によって、不即不離の妙と背勢の結構を助長する効果をもたらしている。

(二) 筆画の輪郭がすっきりするまで入念に入墨して整形したり、明瞭に浮き上がらせたりする傾向が顕著で、そのために筆画の一部を削ぐ結果、必然的に筆画の短小化や瘦細化、筆画と筆画の間の距離の拡大をもたらし、そのために、絶妙の不即不離を却って低減することも頻繁である。しかし、端方本入墨者はその瑕疵を気に留めないのか、あるいは危険を恐れないのか、筆画の際にまで攻め入って入墨し、鋭利ですっきりした筆画肌と風通しのよい結構を獲得している。

本稿では、端方本の問題点を検出する方法をとり、端方本の入墨には瑕疵が少なくないことと、その瑕疵の具体的な事例を挙げてきた。しかし、欧法の特徴を読み取りながら勘損と筆画との際を入念に探り当てようとする特色も認められ、その丹念さは他本を凌駕する。しかし、欧法を読み取ることの側面には、欧法に対する入墨者の解釈が入り込む余地を内包する。すなわち、転折部の整形、「口」部右下の整形、背勢の助長などはその具象化であるように、端方本が醸し出す九成宮醴泉銘の書法の特徴や筆趣のうちの幾分かは、端方

本入墨者の解釈に由来するところがあるといっても過言ではない。

(二〇二一・一〇・一五)

注

- (1) 例えば、九成宮醴泉銘を評して、明の王世貞「芸苑卮言」卷一三五に「信本書太傷瘦儉、古法小変、独醴泉銘遒勁之中、不失婉潤、尤為合作爾。」という瘦儉に対する「婉潤」、清の王澐「翰墨指南」卷上「臨摹四則」に「学欧率更、須求其円和処。」という「円和」、梁獻「評書帖」に「顔不及欧。欧以勁勝、顔以円勝。欧書力健而墨円、後世学者不免匾削。」という「墨円」、翁方綱「蘇齋筆記」卷一五「碑刻」に「化度淳古淡遠、醴泉淵渾円勁、不待言矣。至皇甫碑全用險勁、自是本色如此。」にいう「円勁」、郭尚先「芳堅館題跋」卷上「唐九成宮醴泉銘」に「廿載、京師得宋拓醴泉銘三、以此為冠。高華渾樸、法方筆円。」という「渾樸」「筆円」などは、いずれも李祺本により近く、端方本に遠い筆趣である。
- (2) 序言に「清黄国瑾所藏南宋本」と明記する。なお同本は『中国国図書館碑帖精華 第4卷』（北京国図書館出版、二〇〇一）にも収録されている。
- (3) 「此本摹刻極多。明錫山秦氏刻本為最。」（王壯弘「増補校碑隨筆」という摹刻本。

- (4) 碑文中「佳」を含む字には十八字あるが、うち5①維、7④観、12②雖、16③雜、17④観、20②観【D表掲載】、28③雖、35①雜、37②雖の九字は小横画を消去せず、14①離【B表掲載】、15②旧【B表掲載】、22②双【B表掲載】、23④唯【B表掲載】、25④応、28④懼、31①惟【B D表掲載】、31②膺、34③応の九字は消去する。